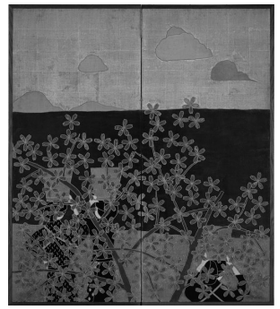
藤井達吉絵画作品の印章使用例について
碧南市藤井達吉現代美術館所蔵作品を中心に

日置　樹也

（図１）「静物・花」



「大島風物図屏風」右隻

（図２）「大島風物図屏風」左隻

はじめに

藤井達吉（一八八一―一九六四）は、近代工芸の先駆者、そして独自の道を切り開いた総合芸術家として知られている。大正から昭和初期にかけて工芸の近代化を目指し、職人的な工芸という分野から芸術の領域へ高めようとしたこと、その一方で、藤井の生涯の中で展開された、油彩画、工芸的な屏風、日本画、墨画などの絵画作品、そして様々な図案など藤井の画業、そして制作の変遷は、いくつもの先行研究によって指摘されている。[1]

中でも絵画においては、幅広く豊富な作例の検証に加え、藤井の使用した印章五五種が、『達翁印譜』（愛知県総合芸術研究会・一九六四年）などにまとめられている。[2] しかしながら藤井の手がけた作品の数は多く、また自身が作品に落款を入れることが多くなかったこともあったためか、[3] 制作年の明確な作品は、制作数に対して、それほど多くないのが現状である。当館所蔵の藤井作品も、制作年代が定かではないものが一定数存在する。そこで本稿は、制作年代の明らかな藤井作品の印章から、当館の所蔵作品を中心に印章の使用年代や使用された作品の傾向などを分析し、藤井作品の編年へのアプローチを試みる。

調査の概要

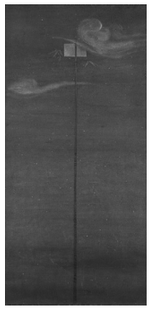
今回の調査にあたり、三一三点の藤井作品をデータとして採用している。内訳は制作年代の明らかな日本画作品三四点、墨画作品四〇点、油彩画作品三点、継色紙作品は四七点、その他四点（工芸的屏風一点、漉込三点）、計一二九点である。そして制作年代の明らかでない日本画五四点、墨画一二四点、継色紙三点、その他五点（拓本四点、版一点）計一八六点である。なお、対幅、三幅対などの作品は対、三幅で一点とした。

そしてこの調査では当館の所蔵作品を中心に筆者が実見、あるいは図版等から印章の判別が可能であったものをまとめた。その作品内訳は表2、表3に記載している。また本稿における印章番号は先に挙げた『達翁印譜』に倣って表記した。

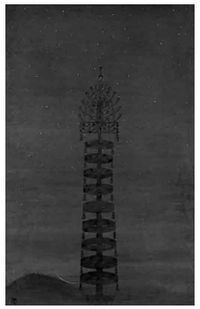
「日光（朝）」

「日光（昼）」

（図３）「日光（夜）」



（図４）「祈り」



（図５）「斑鳩の里」

藤井達吉の絵画制作の変遷

はじめに藤井の絵画作品についてその変遷をまとめておこう。なお藤井の作品は、刺繍や染色、箱物や盆に施された図案が絵画的である、という点から絵画と工芸との区別が困難であることが指摘されている。[4] しかしながら本稿では、紙や絹、キャンバスという支持体に描かれた軸、屏風などの形式の作品を絵画作品として論を進めていく。

藤井達吉は一九一二年に結成された「フュウザン会」に参加している。藤井初期の絵画は、この時の交友関係から油彩画を手掛けたと考えられている。[5] 藤井は自身の洋画について「洋画は、油絵で以前相当描いたがずっと前に止めた。」と語っている。[6]

現在、所在が明らかな油彩作品は八点であるが、[7] それらの多くは、風景や静物、草花を描いた作品であり、「大島遠望」（一九一五年頃・麻布、油彩・愛知県美術館蔵）のような薄塗を基調とした、当時新しい傾向であった外光派風の穏健な画風が多く見られる。また外光派風の作品の中でも「風景（日の出）」（一九一五年頃・紙、油彩・個人蔵）は、印象派の画家、クロード・モネ（一八四〇―一九二六）を彷彿とさせる作品であることが指摘されている。[8]

さらに藤井は油彩画を手掛けるにとどまらず、日本画の材料で西洋絵画の表現を試みている。「静物・花」（一九二〇年頃・絹本彩色・個人蔵）（図1）はその試みの一例と言えるだろう。花瓶に生けられた花を描く本作は、主題に加え、特に花の筆致から藤井の挑戦を伺い知ることができる。加えてこの作品は、藤井がオディロン・ルドン（一八四〇―一九一六）の作調を意識して描いた可能性が指摘されている。[9] このように大正中頃の藤井の絵画作品は、西洋美術から影響を受けた作品、そして日本画という枠組みの中で試行錯誤を行った作品などを見ることができる。

またこの頃の藤井は工芸的な屏風をいくつも制作している。「棕櫚図屏風」（一九一六年頃・打出、七宝、銅、六曲一隻・京都国立近代美術館蔵）や「草木図屏風」（一九一六年頃・彫刻、螺鈿、七宝、鉛象嵌、着色、木、二曲一隻・東京国立近代美術館蔵）など銅板の打出や七宝を使ったもの、「大島風物図屏風」（一九一六年・布縫付、刺繍、着色、紙、二曲一双・碧南商工会議所蔵）（図2）のように布や刺繍による作品などがある。しかし一九一六年頃を境に、工芸的な屏風の発表は減っていく。藤井は画業の中でも屏風作品を多く制作しているが、工芸的な技法による屏風はこの時期における藤井の特徴の一つと言ってよいだろう。

大正後半の藤井は主に日本画家としての活動を展開していく。第八回再興院展（日本美術院展）へ「山芍薬」（一九二一年・着色、絹・岡崎市美術館蔵）を出品し、入選、院友に推されている。その後二回の出品、一九二五年院展での落選ののち、個展を中心に活動していく。ここでも自然を主題に取り上げ、「日光（朝・昼・夜）」（一九二五年・紙本彩色、三幅対・個人蔵）（図3）や「四季草花図」（一九二六年・絹本彩色、四幅対・岡崎市美術館蔵）のように岩絵具を用いた繊細な描写による日本画、「密陀月五十年前」（大正後期・紙本着色、漆・愛知県美術館蔵）のよう

な密陀絵、「うるし深山」(大正後期・漆、着色、絹・岡崎市美術館蔵)などの漆画、あるいは墨画などそのバリエーションは多彩である。

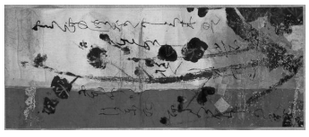
昭和に入ると藤井はさらに絵画作品への制作に打ち込んでいく。自然観照の重視は深まり、扱う主題も草木、花に加え、日や月、星などと幅広くなる。またこの頃の傾向として、一九三五年以降、特別な場合を除き、絹を用いず、紙に描くこと、加えて紙そのものの素材を活かす手法を採っていることが指摘される[10]。そして、この頃から藤井の絵画は、「祈り」(一九三五～一九四五年代・紙本彩色・当館蔵)(図4)や「斑鳩の里」(一九四五～五五年代・紙本彩色、金泥・個人蔵)(図5)のように視線が直線的に天空へ向かう傾向が見られるようになる[11]。

晩年には、これまでの自然の景物・事象を描いた作品に加え、遠く山並みを見渡すような、「山十題」(一九六四年・紙本墨画、一〇点組・愛知県美術館蔵)、「四国遍路」(一九六四年・紙本墨画、紙本漆画、一〇点組・愛知県美術館蔵)など渇墨、漆による山水画、そして絵画や工芸的要素、書や和歌などを一つの作品に組み合わせた「継色紙」を制作する。

「継色紙」は本紙に様々な紙や布を継いだり、貼ったりすることで、独特の風合いを出した上に、顔料、箔、螺鈿など多様な材料、技法を用いてモチーフを描き、歌を書きつけたものである。「継色紙(はろはろと)」(一九四五年以降・継紙、着色、墨書、金箔・当館蔵)(図6)や「継色紙(うめのはな)」(一九四五年以降・継紙、漆画、墨書、金箔・当館蔵)(図7)のように、ここでも草花や自然の景物等をモチーフにし、さらに自作の歌、あるいは万葉集などから引用、本歌取りしたものを書く。これらの多くは一九四五年以降に制作されており、晩年藤井が到達した、それまで自身が目指してきた「総合芸術」のひとつの到達点ともいえる作品群であろう。

以上藤井の絵画作品の変遷を時代によって大きく四つに分類し、大まかにたどってきた。藤井は自然観察を追求しながら、油彩や工芸技法、日本画、墨画、継色紙と多様な技法、表現を試み、作品を描いていったのである。

(図6)「継色紙(はろはろと)」



(図7)「継色紙(うめのはな)」

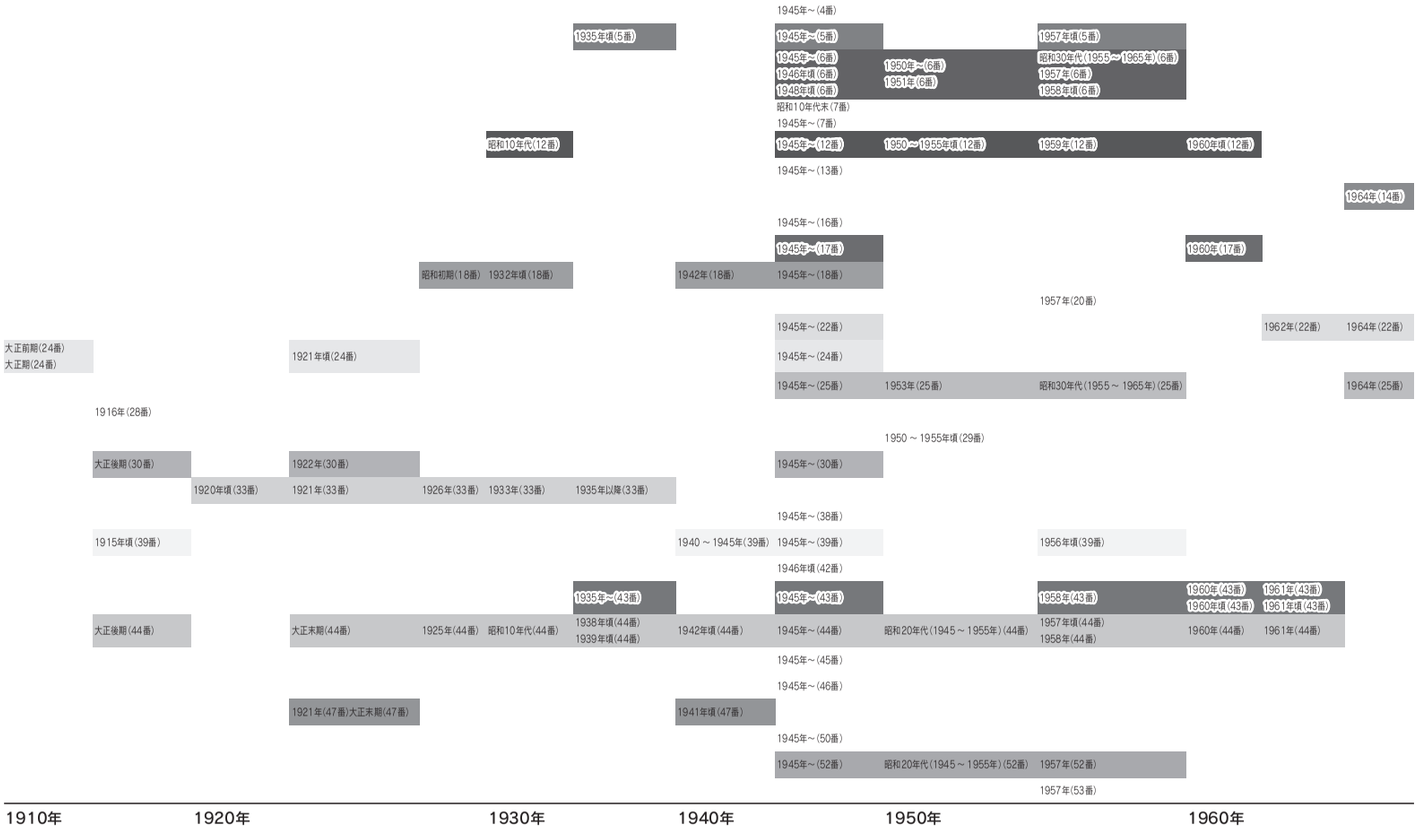
(図8)「山(ひとの世の)」

印章による作品分類

次に印章使用例から作品分布を見ていく。今回の調査から、制作年の明らかな作品の印章を二八種類確認できた。これらを年代による印章の分布として表1にまとめた。加えて作品の分類は表2、表3にまとめた。

表1を見ると、まず一九四五年以前、以後に大きく分けることができる。一九四五年以降から印章の使用例が大きく広がっている。例えば、一九四五年以前では、一一種類(五番、一二番、一八番、二四番、二八番、三〇番、三三番、三九番、四三番、四四番、四七番)の印が使用されているが、一九四五年以降では二六種類の使用を確認することができる。このうち二八番と三三番、四七番以外は一九四五年以降にも使用例が見られる。一方で一八種(四番、

表1　印譜番号と使用年代



※藤井作品の中で印があり、年代の明らかなもの、かつ筆者によって印の判別ができた作品を掲載した。
※番号は『達弱印譜』(愛知県総合芸術研究会、1964年)に則った。
※当館所蔵作品以外は『藤井達吉の芸術』(1991)、『藤井達吉展』(東京国立近代美術館／愛知県美術館・1996)、『碧南市制50周年記念特別展　藤井達吉の世界―郷土が生んだ近代工芸の先駆者―』(1998)、『画家としての藤井達吉―創作の原点を求めて―』(碧南市藤井達吉現代美術館・2009)、『藤井達吉の全貌―野に咲く工芸・宙を見る絵画』(宇都宮美術館／岡崎市美術博物館／渋谷区立松濤美術館・2013)などを参考にした。

表２　藤井達吉作品（絵画）　印章年表（年代の明らかなものに限る）

西暦	元号	印譜番号	印譜画像 （縮尺は一律ではない）	作品名	作品数
1915年頃	大正４年頃	39番		「大島遠望」（油彩・カンヴァス・愛知県美術館蔵）　39番	1
1916年	大正５年	28番		「大島風物図屏風」（布縫付、刺繍、着色、紙、二曲一双・碧南商工会議所蔵）　28番	1
1920年頃	９年頃	33番		「静物・花」（絹本彩色・個人蔵）　33番	1
1921年	大正10年	33番、47番		「山芍薬」（絹本彩色・二曲一隻・岡崎市美術館蔵）　33番 「紫さんご」（絹本彩色・金泥・当館蔵）　47番	2
1921年頃	10年頃	24番		「山芍薬」（絹本彩色・軸装・愛知県美術館蔵）　24番	1
1922年	９年頃	30番		「西行庵」（紙本墨画・個人蔵）　30番	1
1925年	14年	44番		「日光」（三幅対のうち朝・夜）（紙本彩色・個人蔵）	1
1926年	15年	33番		「四季草花図」（四幅対）（絹本彩色・岡崎市美術館蔵）　33番	1
	大正前期	24番		「うさぎ島」（油彩・紙・個人蔵）　24番 「鶏頭」（油彩・紙・個人蔵）　24番	2
	大正後期	30番、44番 47番		「椿」（絹本彩色・個人蔵）　30番 「薊図」（紙本彩色・二曲一双）（個人蔵）　44番 「うるし深山」（漆・絹本彩色岡崎市美術館蔵）　47番	3

西暦	元号	印譜番号	印譜画像 （縮尺は一律ではない）	作品名	作品数
	大正末	44番 47番		「しゅろ草」（絹本彩色・個人蔵）　44番 「富士あざみの花」（絹本彩色・個人蔵）　47番	2
	昭和初期	18番		「葡萄ともみぢ」（紙本彩色・愛知県美術館蔵）　18番 「茄子」（orfch3）（紙本墨画・当館蔵）　18番	2
1932年頃	昭和７年頃	18番		「あざみ」（紙本彩色・愛知県美術館蔵）　18番	1
1933年	昭和８年	33番		「沸殿図」（紙本彩色・当館蔵）　33番	1
1935年頃	昭和10年頃	５番		「海辺の月」（紙本彩色・愛知県美術館蔵）　５番	1
1935年以降		33番、43番		「山水（岩屋寺）」（紙本墨画・当館蔵）　33番 「入野松原絵巻」（紙本墨画墨書・当館蔵）　43番	2
1938年頃	13年頃	44番		「日の出」（紙・漉込・愛知県美術館蔵）　44番	1
1939年頃	14年頃	44番		「烏賊群雄図屏風」（紙本漆画淡彩・六曲一双屏風・当館蔵） 44番	1
1941年頃	16年頃	47番		「土佐の海」（紙・漉込・愛知県美術館蔵）　47番	1
1942年	17年	18番		「出現」（対幅）（紙本彩色・愛知県美術館蔵）　18番	1

研究紀要
藤井達吉絵画作品の印章使用例について　碧南市藤井達吉現代美術館所蔵作品を中心に

西暦	元号	印譜番号	印譜画像 （縮尺は一律ではない）	作品名	作品数
1942年頃	17年	18番		「戦場ヶ原」（紙本彩色・愛知県美術館蔵）　18番	1
1942年頃か	17年頃か	44番		「旭日瑞雲・不盡迎陽」（紙本着色・六曲一双屏風・当館蔵） 44番	1
	昭和10年代	44番、12番		「春爛漫・満山紅葉」（紙本彩色・当館蔵）　44番 「小原ぬも」（紙本彩色、金泥・当館蔵）　12番	2
1940～ 1945年	昭和15～19年	39番		「朝映」（紙本彩色・愛知県美術館蔵）　39番	1
	昭和10年代末	7番		「阿弥陀の光」（紙本彩色・個人蔵）　7番	1
1946年頃	21年頃	6番、42番		「雨」（紙本墨画・愛知県美術館蔵）　6番 「雨（小鳥）」（紙本墨画・愛知県美術館蔵）　42番	2
1948年頃	23年頃	6番		「夢に見る山」（紙本彩色・愛知県美術館蔵）　6番	1
1951年	26年	6番		「むれゆく鷺」（紙本彩色・愛知県美術館蔵）　6番	1
1953年	昭和28年	25番		「土星」（紙本彩色・個人蔵）　25番	1
1945年～ 1955年代	昭和20年代	44番、52番		「御前たちはな」（紙本墨画、金泥・当館蔵）　44番 「斑鳩の里」（紙本彩色、金泥・個人蔵）　52番	2

研究紀要
藤井達吉絵画作品の印章使用例について　碧南市藤井達吉現代美術館所蔵作品を中心に

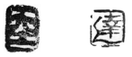
西暦	元号	印譜番号	印譜画像 （縮尺は一律ではない）	作品名	作品数
1950年～ 1955年頃	昭和25年～ 30年頃	12番、29番		「碧南にて（げんごろう）」（紙本墨画・当館蔵）　12番 「ひげがき山」（紙本墨画・当館蔵）　29番	2
1945年～	昭和20年以降	5番、6番 18番、25番 30番、44番 45番		「梅」（紙本墨画・当館蔵）　5番 「竹（上品上生）」（紙本墨画墨書・当館蔵）　5番 「旅人われ山の」（紙本彩色、金泥・当館蔵）　6番 「梅鉢茶碗」（紙本墨画、金泥・当館蔵）　6番 「山雨の図（をばらぬの）」（紙本墨画・当館蔵）　18番 「梅（これの世に）」（紙本漆画・当館蔵）　18番 「遍路の思い出」（紙本墨画・当館蔵）　25番 「小原の竹絵巻」（漉込着色墨書・当館蔵）　30番 「いその松原」（紙本墨画・当館蔵）　44番 「なすび」（紙本墨画金泥・当館蔵）　44番 「かきつばた」（紙本墨画墨書・当館蔵）　44番 「さぎすげの花」（紙本彩色・当館蔵）　44番 「まて貝（いめに見し）」（紙本墨画墨書・当館蔵）　45番	13
1950年～	昭和25年以降か	6番		「月明の衣ヶ浦」（紙本彩色・個人蔵）　6番	1
1957年	昭和32年	6番、20番 52番、53番		「椿の翁」（紙本彩色墨書・当館蔵）　6番 「やまのさち」（漉込墨書・当館蔵）　52番 「喜寿」（紙本墨画・岡崎市美術館蔵）　20番、53番 「山水（かしこしや）」（紙本墨画・当館蔵）　20番、53番 「山水（ひとの世の）」（紙本墨画・当館蔵）　20番、53番	5
1957年頃	昭和32年頃	5番、44番		「雪後」（紙本彩色・当館蔵）　5番 「大和路」（紙本着色金泥・当館蔵）　44番	2
1958年		43番、44番		「宮崎の春」（紙本墨画・当館蔵）　43番 「壺」（紙本墨画・岡崎市美術館蔵）　44番	2
1959年頃		12番		「ゆず（ことしもや）」（紙本彩色墨書・当館蔵）　12番	1
1960年	昭和35年	17番、43番 44番		「入野松原」（紙本墨画・岡崎市美術館蔵）　17番 「ひげがき山」（紙本墨画・岡崎市美術館蔵）　43番 「ひげがき山」（紙本墨画・岡崎市美術館蔵）　44番	3
1960年頃		43番		「山（そかい十五年）」（紙本墨画墨書・当館蔵）　43番	1

表３　藤井達吉作品（継色紙）　印章年表（年代の明らかなものに限る）

西暦	元号	印譜番号	印譜画像 （縮尺は一律ではない）	作品名	作品数
1945年～	昭和20年以降	４番		「継色紙（梅ヶ枝の）」（継紙、墨書・当館蔵）　４番	1
		５番		「継色紙（やまはなと）」（紙本彩色、金泥・当館蔵）　５番	1
		６番		「継色紙（いほやまを）」（紙本彩色、墨、金箔、銀泥・当館蔵）　６番 「継色紙（あまねくも）」（紙本墨書、漆、金銀箔・当館蔵）６番 「継色紙（おひぬれど）」（紙本墨書、漆、金銀箔・当館蔵）６番 「継色紙（みちとへど）」（紙本彩色墨書、金泥・当館蔵）６番 「継色紙（はろはろと）」（継紙、墨書、金箔・当館蔵）　６番 「継色紙（やまのおくに）」（継紙、墨書、金箔・当館蔵）６番 「継色紙（わかきひとの）」（継紙、墨書・当館蔵）　６番 「継色紙（やまふかく）」（紙本彩色、金箔、金泥、螺鈿・個人蔵）　６番 「継色紙（さみしさを）」（紙本彩色墨書、金泥・個人蔵）６番 「継色紙（ゆめよ夢）」（紙本彩色墨書、金箔・個人蔵）　６番 「継色紙（やまみちを）」（紙本彩色墨書、金泥・個人蔵）６番	11
		７番		「継色紙（こえかぎり）」（紙本淡彩墨書・当館蔵）　７番	1
		12番		「継色紙（やまのたびの）」（継紙、朱、墨書、金箔・当館蔵）12番 「継色紙（やまふかく）」（継紙、墨書、金箔・当館蔵）　12番	2
		13番		「継色紙（うめみれば）」（紙本彩色、金箔、金泥・当館蔵）13番	1
		16番		「継色紙（あおやぎの）」（紙本彩色墨書・当館蔵）　16番 「継色紙（には見れば）」（紙本彩色墨書、版、金箔・当館蔵）16番	2
		17番		「継色紙（これのよに）」（紙本金銀箔、金泥・個人蔵）　17番	1

西暦	元号	印譜番号	印譜画像 （縮尺は一律ではない）	作品名	作品数
1961年	昭和36年	43番、44番		「高き山」（紙本墨画・岡崎市美術館蔵）　43番 「山」（紙本墨画・岡崎市美術館蔵）　43番 「山」（紙本墨画・当館蔵）　43番 「茶碗」（紙本墨画・岡崎市美術館蔵）　44番	4
1962年	昭和37年	22番		「あやめ」（紙本墨画・当館蔵）　22番	1
1964年	昭和39年	14番、22番 25番		「四国遍路」（10点のうち）（紙本墨画・愛知県美術館蔵）14番 「朝陽静波」（紙本墨画・当館蔵）　14番 「山十代」（10点のうち）（紙本墨画・愛知県美術館蔵）　22番 「水墨風景」（紙本墨画・当館蔵）　25番	4
	昭和30年代	６番 25番		「風外和尚」（紙本墨画・当館蔵）　６番 「水墨風景」（紙本墨画・当館蔵）　25番	2

※番号は『達翁印譜』（愛知県総合芸術研究会、1964年）に則った。
※当館所蔵作品以外は『藤井達吉の芸術』（1991）、『藤井達吉展』（東京国立近代美術館／愛知県美術館・1996）、『碧南市制50周年記念特別展 藤井達吉の世界―郷土が生んだ近代工芸の先駆者―』（1998）、『画家としての藤井達吉―創作の原点を求めて―』（碧南市藤井達吉現代美術館・2009）、『藤井達吉の全貌―野に咲く工芸・宙を見る絵画』（宇都宮美術館／岡崎市美術博物館／渋谷区立松濤美術館・2013）などを参考にした。

研究紀要
藤井達吉絵画作品の印章使用例について　碧南市藤井達吉現代美術館所蔵作品を中心に

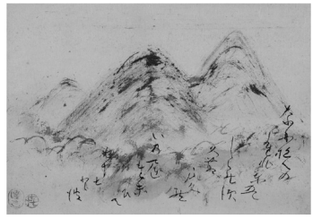
西暦	元号	印譜番号	印譜画像 （縮尺は一律ではない）	作品名	作品数
1945年～	昭和20年以降	22番		「継色紙（さみだれて）」（紙本墨書金銀箔・当館蔵）　22番	1
		24番		「継色紙（かすがぬを）」（布、墨書、金、拓本、螺鈿・個人蔵）　24番	1
		25番		「継色紙（いふなかれ）」（紙、墨、金箔、金泥・当館蔵）25番 「継色紙（いはしみつ）」（紙本、墨、金銀箔、金泥、漆・当館蔵）　25番 「継色紙（夢のごと）」（継紙、墨書、金箔・当館蔵）　25番 「継色紙（やまのおくの）」（継紙、墨書、金箔・当館蔵）25番 「継色紙（庵庭も…）」（紙本彩色金泥金銀箔墨書・当館蔵）25番	5
		38番		「継色紙（ゆめのごと）」（継紙、墨書、金箔・当館蔵）　38番 「継色紙（いくとせを）」（継紙、朱書、金箔・当館蔵）　38番	2
		39番		「継色紙（銅ひはし）」（紙本彩色、墨、金銀箔・当館蔵）39番	1
		43番		「継色紙（はろはろに）」（継紙、墨書、金箔・当館蔵）　43番 「継色紙（ひさにして）」（継紙、螺鈿、金箔、金泥・当館蔵）43番 「継色紙（これのよに）」（紙本彩色金銀箔、墨書・当館蔵）43番	3
		44番		「継色紙（をひあねと）」（継紙、墨書、着色、金箔・当館蔵）44番 「継色紙（たがために）」（継紙、墨書、金箔・当館蔵）　44番 「継色紙（庵庭も…）」（紙本彩色金泥金銀箔墨書・当館蔵）44番	3
		46番		「継色紙（しがのあまは）」（継紙、墨書・当館蔵）　46番	1
		50番		「継色紙（ときのはな）」（継紙、着色、墨書・当館蔵）　50番 「継色紙（くもよゆけ）」（紙本墨書、漆、金箔金泥・当館蔵）50番	2

西暦	元号	印譜番号	印譜画像 （縮尺は一律ではない）	作品名	作品数
1945年～	昭和20年以降	22番～24番		「継色紙（たがために）」（継紙、墨書、金箔・当館蔵）　52番 「継色紙（みやざきの）」（継紙、墨書、金箔・当館蔵）　52番 「継色紙（をばらぬの）」（紙本彩色・墨・金箔・当館蔵）52番	3
1956年頃	昭和31年	39番		「継色紙（竹）」（紙本着色・愛知県美術館蔵）　39番 「継色紙（もみぢ）」（紙本着色・愛知県美術館蔵）　39番	2
1958年頃	昭和33年頃	6番		「継色紙（井のくちの）」（継紙、墨書、金箔・当館蔵）　6番	1
1960年頃	35年頃	12番		「継色紙（新春）」（継紙、墨書、漆画・当館蔵）　12番	1
1961年頃	36年頃	43番		「継色紙（いつしかも）」（継紙、着色、墨書、金箔・当館蔵）43番	1

※番号は『達翁印譜』（愛知県総合芸術研究会、1964年）に則った。
※当館所蔵作品以外は『藤井達吉の芸術』（1991）、『藤井達吉展』（東京国立近代美術館／愛知県美術館・1996）、『碧南市制50周年記念特別展 藤井達吉の世界―郷土が生んだ近代工芸の先駆者―』（1998）、『画家としての藤井達吉―創作の原点を求めて―』（碧南市藤井達吉現代美術館・2009）、『藤井達吉の全貌―野に咲く工芸・宙を見る絵画』（宇都宮美術館／岡崎市美術博物館／渋谷区立松濤美術館・2013）などを参考にした。

研究紀要
藤井達吉絵画作品の印章使用例について　碧南市藤井達吉現代美術館所蔵作品を中心に

(図9)「山水(かしこしや)」


(図10)「山水」

(図11)「山雲(なにゆへの)」

六番、七番、一三番、一四番、一六番、一七番、二〇番、二二番、二五番、二九番、三八番、四二番、四五番、四六番、五〇番、五二番、五三番)は一九四五年以降にのみ使用されている。

こうした傾向の理由として二点挙げることができるだろう。一つ目は藤井の画業の変遷によると考えられる。先ほども述べた通り、藤井は大正後半、昭和、そして晩年に至るまで絵画作品制作の比重が高くなる。それに伴い印章の使用例にバリエーションが見られるようになる。また、一九四五年以降に多く制作された継色紙によるものも大きい。一九四五年以降制作とされる継色紙に使用された印章は、一八種類確認している。その内、制作年代の明らかな継色紙作品のみに使用されている印章は、一三番朱文方印「达(達)」、一六番朱文円印「空」、三八番朱文方印「達吉」、四二番朱文印、五〇番朱文方印「空」の五種類である。(なお上記五種類の印章は制作年代不明の墨画、日本画作品でも使用されており、継色紙のみに使用された印章ではないことが分かる。ここから藤井は作品のジャンルによって印章を使い分けていた可能性は低いと考えられる。)このことも一九四五年以降の藤井作品の豊富な印章使用数につながっているのではないだろうか。

二つ目に藤井が積極的には作品に落款を入れない主義であったことが考えられる。先程も述べた通り、藤井が自身の作品に落款を入れなかった逸話は多く伝えられている。[12] ここに伝えられる通り、藤井が制作を積み重ねていく中で、自身の画技が円熟していく後期、晩年の作に多く落款を入れるようになったとすれば、一九四五年以降の印章使用例が増える理由の一つとして考えることができるだろう。

次に印章の種類と年代、作品の傾向を見ていく。一九四五年以前に多く使用されているものは一八番朱文長方印「多都岐知」、二四番朱文円印「達」、三〇番白文円印「達」、三三番朱文長方印「多都伎知」、四七番白文長円印「太都岐知」である。この中で油彩画に使用された印は二四番のみであり、それ以外は日本画、墨画作品等に使用されている。先ほど挙げた通り大正、昭和初期は日本画作品が多いが、ここでも墨画よりも日本画作品の作例が多く、中でも三三番の印を使用している作品はその特徴がよく表れている。

そして二八番の朱文長方印「達吉」印は、一九一六年のみ使用例を確認することができる。該当する作品が通常の日本画、墨画作品ではなく「大島風物図屏風」という工芸的な屏風作品であることは留意するべきだろう。

一九四五年以降使用例が多い印章は、六番朱文方印「达(達)」、一二番朱文方印「夢」、一二番朱文方印「達」、二五番朱文方印「達」、三九番朱文方印「達翁」、四三番朱文方印「空」、五二番朱文方印「達」である。これらの印は墨画、日本画、継色紙に使用されている。一九四五年以前と比べ墨画や継色紙の割合が高く、二二番、二五番、四三番の印を使用した作品は特に顕著である。画業の後半になるにつれ、絵画作品、中でも墨画の作例が増えていく藤井だが、やはり一九四五年以前に比べ、日本画作品よりも墨画作品の割合が増えていることが分かる。

(図12)「山ぎぼし」

(図13)「立葵」

(図14)「あやめ」

(図15)「朝陽静波」

また複数の印を組み合わせている作例もある。「山(ひとの世の)」(一九五七年・紙本墨画墨書・当館蔵)(図8)、「山水(かしこしや)」(一九五七年・紙本墨画墨書・当館蔵)(図9)など4点の墨画作品が二〇番朱文円印、五三番朱文長円印「達吉」の印を合わせて使用している。この組み合わせは制作年代不明の作品「山水」(紙本墨画・当館蔵)(図10)、「山雲(なにゆえの)」(紙本墨画墨書・当館蔵)(図11)でも見ることが出来る。一九五七年に山水風景を描いた墨画作品に共通する組み合わせとして興味深い印章の使用例である。

一方で藤井の画業を通して使用されている印が二種類見られる。三九番朱文方印「達翁」、四四番朱文方印「達」である。三九番には油彩画の使用例が見られるが、それ以外にはどちらも日本画、墨画、継色紙に使用例がある。この点は一九四五年以前、以降の印章使用例とも共通している。

藤井は様々なジャンルを横断した画業の中で、ジャンルや画題によって使い分けることなく様々な印を使用したと考えられる。

制作年代不明な作品の印章使用例

次に印章がある藤井達吉作品のうち、制作年代が不明な作品を見ていく。今回調査した三一三点の内、日本画五四点、墨画一二四点、継色紙三点、その他五点(拓本四点、版一点)が該当する。制作年代の明らかな作品と比較すると、継色紙、油彩画作品を除きその数は多く、特に墨画作品は約三倍となっている。

表4は当館所蔵、個人蔵作品の制作年代が明らかでない作品の内訳である。表2、3と比べると五番朱文方印「達翁」、六番朱文方印「达(達)」、一二番朱文方印「夢」、二二番朱文方印「達」、二五番朱文方印「達」、四四番朱文方印「達」、五二番朱文方印「達」の使用例が多い。画業全体を通して使用された四四番を除いた7つの印は、表1に照らし合わせると、一九四五年以降に使われた印が多いことが分かる。

また一九四五年以前に多く使用されていた印を持つ作品は日本画、墨画、あるいは継色紙が見られる。制作年代の明らかな作品の傾向と比較して日本画、墨画作品の偏りは少ない。一方、一九四五年以降使用例が多い印章を持つ作品の傾向は、制作年の明らかな作品の傾向と同じく、墨画の割合が多くなる。これは藤井の画業の変遷と概ね合致する。

印章使用例からの制作年代絞り込み

ここからは、これまでの印章使用例の調査統計をもとに、いくつか作品を取り上げ、簡単にではあるが年代の絞り込みを試みたい。

表４　藤井達吉作品（制作年代不明）の印章使用分布
※印のないもの、筆者が判別不明なものを除く

印譜番号	参考印譜画像 （縮尺は一律ではない）	作品名	作品数
１番		「熊野川の奥」（紙本墨画・当館蔵）　１番	1
４番		「石蕗の花」（紙本墨画金泥・個人蔵）　４番 「山旅」（紙本墨画・当館蔵）　４番 「流雲」（紙本墨画・当館蔵）　４番 「明神池」（oafj19）（紙本墨画金泥・当館蔵）　４番 「朝雲」（紙本着色、漆画、金泥・当館蔵）　４番	5
５番		「石仏（すぎ来にし）」（紙本、拓本、墨書朱印・当館蔵）　５番 「松原の日出」（omfj18）（紙本墨画朱金泥・当館蔵）　５番 「鶏頭花」（omfj19）（紙本墨画彩色・当館蔵）　５番 「一切空」（omfch26）（紙本墨画・当館蔵）　５番 「信濃路」（紙本墨画・個人蔵）　５番 「梅図」（紙本墨画墨書・個人蔵）　５番 「立冬の庭」（紙本着色・個人蔵）　５番 「薊（はつなつの）」（紙本着色・個人蔵）　５番 「晩秋の野辺」（紙本着色・個人蔵）　５番 「山雲去来」（紙本墨画・個人蔵）　５番	10
６番		「山」（紙本墨画・当館蔵）　６番 「山水」（fch42）（紙本墨画・当館蔵）　６番 「松原に富士」（fj27）（紙本彩色金泥・当館蔵）　６番 「信濃路」（fch44）（紙本墨画・当館蔵）　６番 「雨」（fch46）（紙本墨画・当館蔵）　６番 「雪の朝」（紙本彩色・個人蔵）　６番 「山」（oafch19）（紙本墨画・当館蔵）　６番 「筑紫路」（oafch29）（紙本墨画・当館蔵）　６番 「山雲去来」（oafch31）（紙本墨画・当館蔵）　６番 「水墨自画像」（紙本墨画・当館蔵）　６番 「雨」（紙本墨画・個人蔵）　６番 「雪の山」（紙本彩色・個人蔵）　６番 「あめ」（ytj16）（紙本墨画・当館蔵）　６番 「筑紫路」（fch47）（紙本墨画・当館蔵）　６番 「墨流し下絵（むしなけば）」（紙本墨書、墨、着色・当館蔵）　６番 「山水」（oafch9）（紙本墨画・当館蔵）　６番 「山水（けさもまた）」（oafch10）（紙本墨画・当館蔵）　６番 「草花図（誰がために）」（紙本着色、墨書き）（個人蔵）　６番 「なにをこひ」（紙本着色・個人蔵）　６番	19
７番		「あめ」（fch8）（紙本墨画・当館蔵）　７番 「あざみ」（紙本彩色・当館蔵）　７番 「山並」（紙本彩色・当館蔵）　７番 「志な乃の瀧」（紙本墨画・当館蔵）　７番 「けふもまた」（紙本墨画・当館蔵）　７番 「寒雨孤竹」（紙本墨画墨書・当館蔵）　７番 「春の山」（紙本墨画淡彩・個人蔵）　７番 「白根葵」（紙本着色・個人蔵）　７番 「風景」（dfch31）（紙本墨画・個人蔵）　７番 「頭塔石仏拓本その一」（紙本墨、拓本・個人蔵）　７番 「頭塔石仏拓本その二」（紙本墨、拓本・個人蔵）　７番 「頭塔石仏拓本その三」（紙本墨、拓本・個人蔵）　７番	12
12番		「あめ」（fch30）（紙本墨画・当館蔵）　12番 「静寂」（紙本墨画・当館蔵）　12番 「ゆず（ことしもや）」（紙本着色、墨書・当館蔵）　12番 「たけのこ（のふもなき）」（紙本墨画墨書・当館蔵）　12番 「富士山」（stfj3）（紙本着色・当館蔵）　12番 「月の図（知多見の歌）」（紙本墨書・当館蔵）　12番 「聖徳太子像」（紙本彩色・当館蔵）　12番 「信濃の旅」（個人蔵）　12番 「孤峰」（紙本墨画・個人蔵）　12番 「干柿（やまさとは）」（紙本着色墨画墨書・個人蔵）　12番 「翁草（やまのべに）」（紙本着色、墨書・個人蔵）　12番 「山」（dfch12）（紙本墨画・個人蔵）　12番	12

印譜番号	参考印譜画像 （縮尺は一律ではない）	作品名	作品数
13番		「行雲流水」（紙本墨画・個人蔵）　13番 「孤峯残月」（紙本墨画着色墨書・当館蔵）　13番	2
14番		「かりのいほの」（紙本墨書、版・当館蔵）　14番 「山（ことしもや）」（紙本着色、墨書・当館蔵）　14番 「紅梅」（fch15）（紙本墨画着色・当館蔵）　14番 「すすき原」（紙本墨画、銀泥・当館蔵）　14番 「富士」（fj35）（紙本彩色・当館蔵）　14番 「ながれ」（紙本彩色、墨・当館蔵）　14番 「ツユクサ」（紙本墨画着色・当館蔵）　14番 「水仙」（紙本着色・個人蔵）　14番	8
16番		「百合（ゆへしらに）」（紙本漆画墨書・当館蔵）　16番 「日の出」（紙本墨画金泥・当館蔵）　16番 「明神池」（oafj22）（紙本墨画、金泥・当館蔵）　16番 「霊山」（isfch3）（紙本墨画・当館蔵）　16番 「山」（ytj15）（紙本墨画・当館蔵）　16番	5
17番		「松」（dfch17）（紙本墨画・個人蔵）　17番 「老松の図」（orfch1）（紙本墨画・当館蔵）　17番 「松」（dfch16）（紙本墨画・個人蔵）　17番	3
18番		「残月」（紙本彩色・個人蔵）　18番 「山ぎぼし」（紙本着色・個人蔵）　18番 「水引草」（紙本墨画・個人蔵）　18番 「山荷葉」（紙本墨画着色金泥・個人蔵）　18番	4
19番		「白梅図」（紙本墨画淡彩・個人蔵）　19番 「柿（をばらぬの）」（紙本墨画、墨書・当館蔵）　19番	2
22番		「山帰来」（紙本墨画着色・当館蔵）　22番 「富士」（紙本墨画金泥墨書・当館蔵）　22番 「水墨風景」（fch35）（紙本墨画・当館蔵）　22番 「山水」（oafch20）（紙本墨画・当館蔵）　22番 「ひげがき山」（isfch10）（紙本墨画・当館蔵）　22番 「風景」（omfch22）（紙本墨画・当館蔵）　22番 「山」（dfj38）（紙本着色・個人蔵）　22番 「入野松原（しおけむり）」（紙本漆画墨書・当館蔵）　22番 「山」（stfch2）（紙本墨画・当館蔵）　22番 「山」（dfch28）（紙本墨画・個人蔵）　22番	10
24番		「岩山」（okfch6）（紙本墨画・当館蔵）　24番 「山水図」（omfch18）（紙本墨画・当館蔵）　24番 「山（浄寂は）」（紙本墨画墨書・個人蔵）　24番 「不二」（fch50）（紙本墨画・当館蔵）　24番 「草木図（けふやしなめ）」（紙本着色、墨書・当館蔵）　24番	5
25番		「山」（fch12）（紙本墨画・当館蔵）　25番 「赤富士」（紙本着色・当館蔵）　25番 「雨」（紙本墨画・当館蔵）　25番 「山」（fch25）（紙本墨画・当館蔵）　25番 「月」（oafj23）（紙本墨画金泥・当館蔵）　25番 「夢にみし山」（isfch1）（紙本墨画・当館蔵）　25番 「霊山」（isfch4）（紙本墨画・当館蔵）　25番 「遠山無限」（紙本墨画・当館蔵）　25番 「うるし山」（紙本漆画・当館蔵）　25番 「山」（okfch7）（紙本墨画・当館蔵）　25番 「雑木林」（紙本着色・当館蔵）　25番	11

研究紀要
藤井達吉絵画作品の印章使用例について　碧南市藤井達吉現代美術館所蔵作品を中心に

印譜番号	参考印譜画像 （縮尺は一律ではない）	作品名	作品数
26番		「日の出」（ykfch1）（紙本墨画・当館蔵）　26番 「茄子（小原ぬも）」（紙本墨画墨書・当館蔵）　26番	2
29番		「野草図（やはぎづつみの）」（紙本着色、墨書、金泥・当館蔵）　29番	1
30番		「筍と實梅」（紙本墨画金泥・当館蔵）　30番 「なつみかん」（紙本墨画金泥・当館蔵）　30番 「赤沼あやめ」（紙本着色・個人蔵）　30番 「人参（おもひきや）」（紙本淡彩・個人蔵）　30番	4
31番		「耶馬渓」（紙本墨画・当館蔵）　31番	1
33番		「梅」（紙本墨画着色墨書・当館蔵）　33番 「松」（dflp3）（紙本漆画・個人蔵）　33番 「継色紙（梅）」（dftsu2）（紙本着色金箔銀泥漆・個人蔵）　33番	3
36番		「やまふかく」（fch43）（紙本墨画・当館蔵）　36番	1
38番		「筑紫にて」（紙本墨画・当館蔵）　38番 「富士（ひさにして）」（紙本着色、墨書・当館蔵）　38番 「山水」（oafj15）（紙本墨画・当館蔵）　38番 「山」（okfch5）（紙本墨画・当館蔵）　38番 「山」（okfch8）（紙本墨画・当館蔵）　38番 「ひげがき山水」（stfch4）（紙本墨画・当館蔵）　38番 「継色紙（むかつおかに）」（紙本着色金箔布墨書・個人蔵）　38番	7
39番		「仏法僧」（fj26）（紙本彩色、墨、金泥・当館蔵）　39番 「山水」（oafch3）（紙本墨画・当館蔵）　39番 「明星」（紙本彩色金泥・当館蔵）　39番 「富士」（omfj10）（紙本彩色銀泥墨書・当館蔵）　39番 「富士」（omfch24）（紙本墨画墨書・当館蔵）　39番	5
43番		「紅富士」（oafj5）（紙本着色、漆画・当館蔵）　43番 「風景」（omfch10）（紙本墨画・当館蔵）　43番 「山」（dfch22）（紙本墨画・個人蔵）　43番 「竹林」（紙本墨画・個人蔵）　43番	4

印譜番号	参考印譜画像 （縮尺は一律ではない）	作品名	作品数
44番		「百合（ひとせを）」（紙本墨書、淡彩・当館蔵）　44番 「柿図（こはる日に）」（紙本墨画・当館蔵）　44番 「朝霞む信濃路」（紙本墨画・当館蔵）　44番 「一切空」（紙本着色・当館蔵）　44番 「峠路」（紙本墨画・当館蔵）　44番 「水墨風景」（fch29）（紙本墨画・当館蔵）　44番 「山」（fch36）（紙本墨画・当館蔵）　44番 「紅葉」（fj30）（紙本彩色・当館蔵）　44番 「かきつばた」（fch48）（紙本墨画・当館蔵）　44番 「石楠花（そのむかし）」（紙本墨画着色、墨書・当館蔵）　44番 「ほうらい」（紙本墨画淡彩・当館蔵）　44番 「竹乃子」（紙本着色・当館蔵）　44番 「山水」（oafch17）（紙本墨画・当館蔵）　44番 「まつしま」（紙本墨画・当館蔵）　44番 「山」（orfch2）（紙本墨画・当館蔵）　44番 「水底生物図」（紙本漆画、墨・当館蔵）　44番 「白梅」（紙本着色・個人蔵）　44番 「養老竹」（紙本墨画・個人蔵）　44番 「ねぎぼうず」（紙本着色墨書・個人蔵）　44番 「芍薬」（紙本着色・個人蔵）　44番	20
46番		「旅をしぞ思ふ」（紙本墨画・当館蔵）　46番	1
47番		「山」（orflp2）（紙本漆画、墨・当館蔵）　47番	1
48番		「霊山」（isfch8）（紙本墨画・当館蔵）　48番 「富士山」（stfj4）（紙本墨画金泥・当館蔵）　48番 「山水」（stfch3）（紙本墨画・当館蔵）　48番 「山」（dfch23）（紙本墨画・個人蔵）　48番	4
50番		「津花」（紙本墨画墨書・当館蔵）　50番 「なすと柿（ことしもや）」（紙本墨画墨書、金泥・当館蔵）　50番	2
52番		「草花図（けふもまた）」（紙本墨画・当館蔵）　52番 「いづこの山ぞ」（紙本墨画・当館蔵）　52番 「雲去来」（紙本墨画・当館蔵）　52番 「いほやまに」（紙本彩色、墨・当館蔵）　52番 「紅梅」（fj37）（紙本彩色、金泥・当館蔵）　52番 「なすび」（fj39）（紙本彩色、金泥・当館蔵）　52番 「はな百合」（紙本墨画・当館蔵）　52番 「月」（isfch13）（紙本墨画・当館蔵）　52番 「松林図（あのあたり）」（紙本墨画墨書・当館蔵）　52番 「月」（orfch6）（紙本墨画淡彩、金泥・当館蔵）　52番 「蔦図」（紙本着色・墨書・当館蔵）　52番 「夕映」（紙本彩色・個人蔵）　52番 「つゆくさ」（紙本墨画墨書・個人蔵）　52番 「ほのお」（紙本着色・当館蔵）　52番 「時雨（けふもまた）」（紙本墨画墨書・個人蔵）　52番	15

研究紀要
藤井達吉絵画作品の印章使用例について　碧南市藤井達吉現代美術館所蔵作品を中心に

印譜番号	参考印譜画像 （縮尺は一律ではない）	作品名	作品数
53番		「遍路（ふでもでば）」（紙本墨画墨書・個人蔵）　53番	1
54番		「信濃路」（fch36）（紙本墨画・当館蔵）　54番 「老梅図（としたけて）」（紙本墨画墨書・当館蔵）　54番 「継色紙（いほにはに）」（紙本着色金箔漆墨書・個人蔵）　54番	3
複数印を持つ作品			
20番、53番		「山水」（fch45）（紙本墨画・当館蔵）　20番、53番 「山雲（なにゆえの）」（紙本墨画、朱・当館蔵）　20番、53番	2
6番、22番		「張り交ぜ屏風（５枚）」（紙本着色・個人蔵）　6番、22番	1

※番号は『達翁印譜』（愛知県総合芸術研究会、1964年）に則った。
※当館所蔵作品以外は『藤井達吉の芸術』（1991）、『藤井達吉展』（東京国立近代美術館／愛知県美術館・1996）、『碧南市制50周年記念特別展 藤井達吉の世界―郷土が生んだ近代工芸の先駆者―』（1998）、『画家としての藤井達吉―創作の原点を求めて―』（碧南市藤井達吉現代美術館・2009）、『藤井達吉の全貌―野に咲く工芸・宙を見る絵画』（宇都宮美術館／岡崎市美術博物館／渋谷区立松濤美術館・2013）などを参考にした。

（図16）「山水風景」

（図17）「山水」

（図18）「ひげがき山」

一八番朱文長方印を持つ「山ぎぼし」（紙本着色・個人蔵）（図12）は、繊細な描写と色の濃淡による花や葉の表現が特徴的な作品である。一八番の印は昭和初期、一九三二年頃、一九四二年、一九四五年以降の使用例が見られる。「山ぎぼし」に見られる特徴は「四季草花図」（一九二六年・絹本彩色、四幅対・岡崎市美術館蔵）や「立葵」（一九二八年頃・紙本着色、墨、金銀泥、漆・当館蔵）（図13）にも見ることができる。また同様の印を用いた「あざみ」（一九三二年頃・紙本彩色・愛知県美術館蔵）や「戦場ヶ原」（一九四二年頃・紙本彩色・愛知県美術館蔵）からもこの特徴を確認できる。この点から一九四五年以前、昭和一〇年代までに描かれた日本画作品である可能性が考えられる。

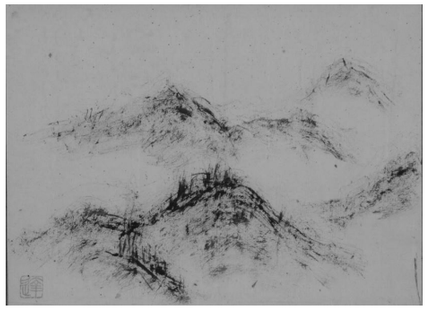
次に二二番朱文方印を持つ作品を取り上げる。この印を持つ作品は継色紙以外、一九六二年、一九六四年と藤井最晩年のものである。「あやめ」（一九六二年・紙本墨画・当館蔵）（図14）や「山十題」（一九六四年・紙本墨画、一〇点組・愛知県美術館蔵）は主に渇墨によって一気呵成に描く。またこれは一四番の印を持つ、「朝陽静波」（一九六四年・紙本墨画・当館蔵）（図15）にも見られる特徴である。

二二番の印がある作品の中で、「水墨風景」（紙本墨画・当館蔵）（図16）、「山水」（紙本墨画・当館蔵）（図17）、「ひげがき山」（紙本墨画・当館蔵）（図18）、「風景」（紙本墨画・当館蔵）（図19）、「山」（紙本墨画・当館蔵）（図20）の五点は同様の特徴が顕著にみられ、晩年の藤井の作風に合致する。加えて、印も同様に晩年に使用されたものであり、ここで挙げた「水墨風景」「山水」「ひげがき山」「風景」「山」などは藤井晩年の作例と考えてよいだろう。

五二番朱文方印を持つ「夕映」（紙本彩色・個人蔵）（図21）は遠くに海を望む夕焼けの景色を描いた作品である。画面下部に配置された青みのある水平線と画面上部に赤みがかった雲、そして雲にかかった月が対照的である。同じく五二番の印を持つ「斑鳩の里」（一九四五～五五年代・紙本彩色、金泥・個人蔵）、また印はないが、「祈り」（一九三五～一九四五年代・紙本彩色・当館蔵）のように、確かな描写とともに、視線が直線的に天空へ向かう傾向を持つ作品である。五二番の印を持つ作品に「やまのさち」（一九五七年・漉込墨画・当館蔵）（図22）があるが、こちらは漉込と墨書によって山々が連なる風景を描いている。作風と印が合致するのは昭和二〇年代、一九四五～五五年頃であるが、印の使用例と異なるものの、一九三五～一九四五年代も視野に入れた方がよいだろう。

以上簡単に、限られた作品ではあるが、使用された印章と作風から年代の絞り込みを試みた。これまで作風や来歴等を制作年代特定の指標としていたが、それに加え印章の使用年代を考慮することで制作年代の絞り込みの信憑性は増すことだろう。中でも作風と印章の使用年代が合致するものは、制作年代を絞り込む上で有効な判断材料となりうるのではないだろうか。

もちろん作風、印章ともに年代の特徴と合わない例、判断の難しいものもある。例えば一四番朱文楕円印は藤井最晩年の作品に見られる印であるが、「かりのいほの」（紙本墨書、版・当館蔵）（図23）や「すすき原」（紙本墨画、銀泥・



（図19）「風景」

（図20）「山」

（図21）「夕映」

当館蔵）（図24）などは渇墨描写によらない特徴が見られる。

また三八番朱文方印「達吉」印を持つ作品、例えば「ひげがき山水」（紙本墨画・当館蔵）（図25）は作風から、藤井晩年の作例かと思われるが、今回の調査からは、藤井晩年の作品への印章使用は確認できていない。

そして四四番の印は使用例が多く、作風と合わせても絞り込みの難しい作品が多くある。これらは今後調査研究を継続し、絞り込んでいく必要があるだろう。

おわりに

以上、当館が所蔵する藤井作品を中心に印章使用例の分析を行った。印章使用例の分布は、大きく一九四五年以前、以降に分けることができる。そして一九四五年以前では、一一種類の印が使用されていることに対し、一九四五年以降では二六種類の使用されている。これは画業の中で日本画、墨画、そして継色紙など絵画制作の比重が増していったこと、自身の画技が円熟していく後期、晩年の作に多く落款を入れるようになったことが考えられる。また一方で画業を通して使用された印章もあり、藤井は油彩画、日本画、墨画、継色紙とジャンルによって印を使い分けることなく、様々な印を使用していたと思われる。

本稿の目的であった、印章から藤井作品編年へのアプローチについては使用された印章の年代が幅広く、印章から年代を特定することは、現段階では難しいと思われる。しかしながら、本稿で試みたように作風や来歴に加え、印章の種類を年代特定のための判断材料のひとつとすることができるのではないだろうか。もちろん今回で藤井の絵画作品全てを網羅し、分析したわけではない。印章の使用年代分布は現段階のものであり、作品の印章だけで制作年代を判断することは困難だろう。当然ながら、これだけで編年を作り上げることは不可能である。今後、さらに多くの作品を調査することで分類の精度を高めることが不可欠であろう。

駆け足の調査であったため、十分な分析には至っていないところがあるが、今回の試みが藤井作品編年への一助となれば幸いである。

（註）

1　碧南市藤井達吉現代美術館『画家としての藤井達吉―創作の原点を求めて―』二〇〇九年、キュレイターズ『藤井達吉の全貌―野に咲く工芸・宙を見る絵画』二〇一三年、などで指摘されている。

2　愛知県総合芸術研究会『達翁印譜』一九六四年のほか、碧南市藤井達吉現代美術館『画家としての藤井達吉―創作の原点を求めて―』二〇〇九年、『碧南市藤井達吉現代美術館所蔵品目録二〇一〇』などにも藤井の印五五種が掲載されている。

3　松尾信資編『孤高の芸術家　藤井達吉翁』一九六五年、三五頁には藤井が昭和天皇第一皇女・照宮成子内親王御成婚の折に、屏風と手筥の制作し、納めたがこの作品にも署名を入れていなかった話が記される。この時藤井は、屏風に署名がないことを宮内省に問われ、自身が拙く、作品に署名しない意思を伝えたという。また昭和初年ころ、当時の阪神電鉄専務太宰政夫に、作品に落款を入れない理由を問われ、自身がまだまだ修養が足らないこと、将来一作でも落款する会心の作を残したいと精進している、と語った（同著、九二頁）など作品に署名や落款を入れなかったエピソードが多く伝えられている。

4　キュレイターズ『藤井達吉の全貌―野に咲く工芸・宙を見る絵画』二〇一三年、九六頁。また藤井最初期の七宝作品「試作・海」（一九一〇年・七宝、銅・愛知県美術館蔵）を取り上げ、「油絵を描くがごとく作られたものである」（同著、七頁）、「小さな画面ながら確かに描かれている」（同著、九六頁）、と指摘がなされるように藤井の工芸作品、あるいは図案には絵画的要素を持ったものがある、という点は留意するべき点であろう。

5　山田光春『藤井達吉の生涯』一九七四年、六二頁、の中で、達吉が油絵を描いたのは、明治の末から大正にかけての四、五年間だったこと、高村光太郎の奨めによって油絵に熱中していたこと、自画像を描いていた時期があることが指摘されている。また、碧南市藤井達吉現代美術館『画家としての藤井達吉―創作の原点を求めて―』二〇〇九年、一〇頁、では、第一回フュウザン会以来の交流のあった洋画家・浜田保光に学んだ可能性が指摘されている。

6　碧南芸術文化振興会事務局編『藤井先生直筆の訂正による碧南市史料（第十一輯）藤井達吉翁』二〇〇三年、二四頁　なお本資料には、前身となる『碧南市史料第十一輯「藤井達吉翁」』が一九五六年に発行されている。一九五六年版には「油繪の作品は空襲で皆焼けた」と記されているが、藤井の手により訂正されている。

7　前掲註4、八頁

8　前掲註4、八頁

9　碧南市藤井達吉現代美術館『画家としての藤井達吉―創作の原点を求めて―』二〇〇九年、一〇頁、碧南市藤井達吉現代美術館『いのちの移ろい展』二〇二一年、四頁などで指摘されている。

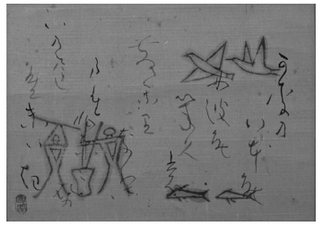
10　碧南市藤井達吉現代美術館『画家としての藤井達吉―創作の原点を求めて―』二〇〇九年、五三頁

11　前掲註1

12　前掲註3

（付記）本稿を成すにあたりご所蔵者様の皆様から格別のご配慮を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

（図22）「やまのさち」（部分）



（図23）「かりのいほの」

（図24）「すすき原」

（図25）「ひげがき山水」